

特 55

281

Vertical text in a rectangular frame, likely a title or classification code, possibly reading "特 55" and "281" vertically.

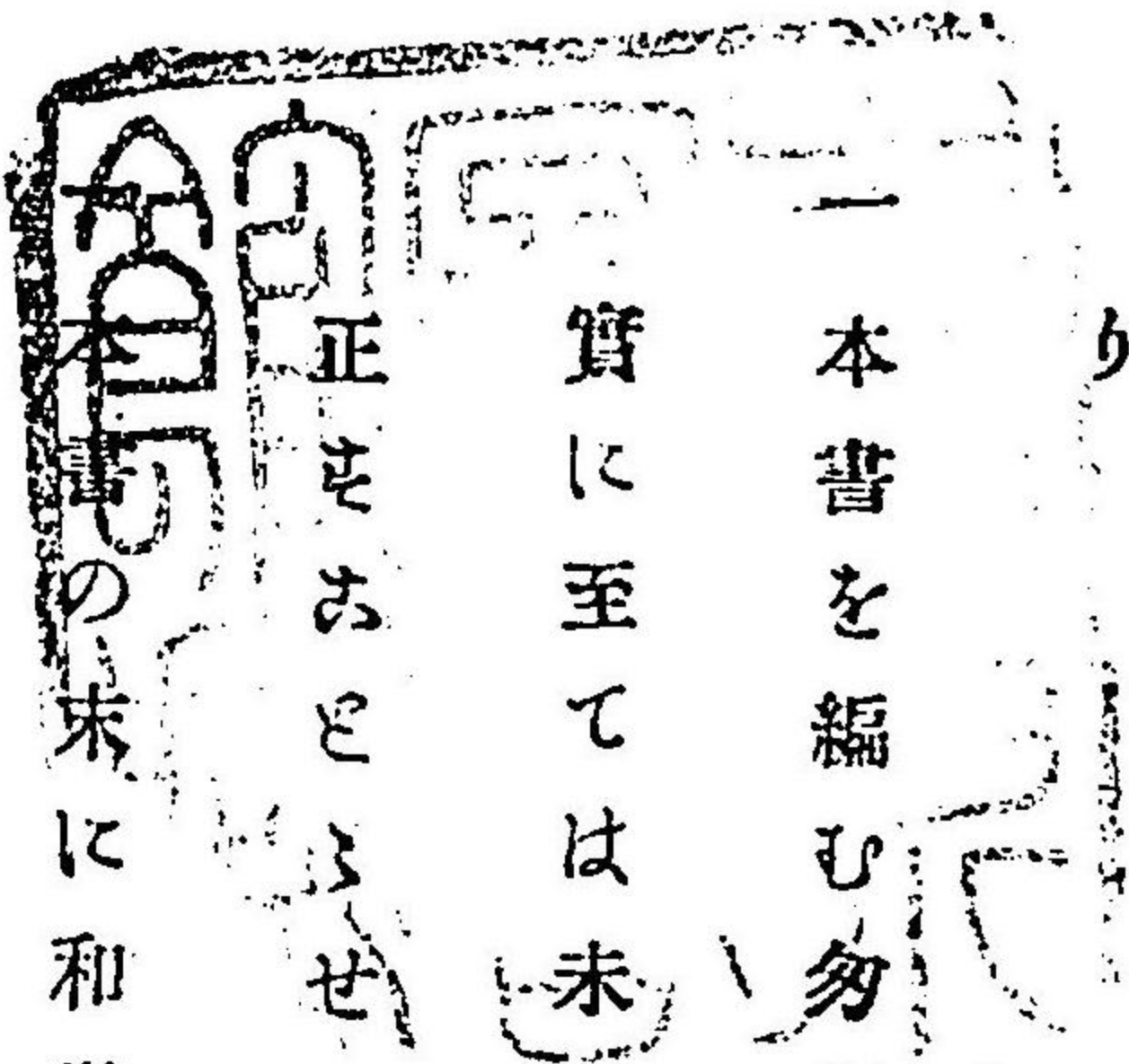
例言

一 本書は南蒲原郡本城村の古刹本成寺の由来（八幡と明）一た

一 本書を編む勿劇の間に成を以て行文疎雑より且つ事

實に至ては未だ盡さざるものあるにつき指摘をまつて

正さおとせり



一 本成寺の由来に付もどより多々研究まべきものあらん

然れ共材料なきを如何せん他日をまち完本となすべし



吉家を大且那の如く待遇するは後年れことなること知るへ山吉家と長尾氏れ一部下に去て謙信公れ驍將なりそ威風の及ふ所知るへ去當時武將の一笑一擧は實に人心を左右せり況や本城寺を去そ威風を異にするゆゑを以て山吉家れ事跡れみかくと美事に傳られりともみへたり而して山吉家の祖先は池頼盛とは信すべか加之今町在中れ嶋に頼盛の墓を安置しそれ子孫とかその戚族とくと唱ふるは歴史れ明あらざる世の中は珍一のらされども決して信憑をへうふさるもれ其詳は古人の物せしもれもあるれみならず昔時傳ふる史傳によりても架空れ事實なる知りぬへ

左れ文書ハ山吉氏と本城寺とれ關係をみるへ本城寺文書中の寫に云く

當表中山吉と被仰合。御加勢れ儀無比類存。依之。大面庄内、薄曾根村、新堀、吉野谷、上條村、令寄進。候御知行於末代。永不可有相違。仍執達如件

永正七年三月七日

爲景判

右れ文書三條長尾氏より出つへきなれども當時上杉家賞罰れ權と爲景之を握を以て如此次第相當ならん

● 本城寺の興隆

日印上人は三條の人なり今上人れ御傳を述るに當り聊り三條町の由來を語らん抑々三條町は源平以來一れ要害にして豪族はるる交迭して威勢を振ひ蒲原全郡の民の草の風は於ける如くよく治まり來りか常なき世の治乱に一變一遷し京都の狀態も源平互に興廢去平家亡ひて後は源氏永く越後を治め引つゝ北條氏交替して來り治め國內之長の年月無事なるとも端なく後醍醐天皇政權御回復の御企あるより諸國勤王の士競ひ起り都に赴けば我越後も新田義貞公一味の黨派頗る多く戦ふ毎にかちを制し忽ち北條氏を亡して都に打ち入 天皇を輔佐し義貞公の御子義顯公の如き越後國守となりて政令を施し玉へかこゝに又足利尊氏と云ふ賊魁ありて 天皇に叛き奉り新田氏をさんく打ち惱まし越後の如き騷亂常に絶間なく遂に足利氏の所領とはなり終りぬ足利氏の國內を治むる國守なるもの交替せしが茲に伊豆信濃越後れ大主として來り治むる人は上杉憲顯とて名望いや高さ貴人なりけり

此君來り領するや政治公明にして名君又世に引つゝ玉ひ國人悦服せまう茲に房能

公の世に當り長尾高景と云ふ名臣あり文をのけまゝ武をねど威風四隣にありやさける此人公に奉するのつく忠を拙き誠をつくすこと奇をさりあらず乃ち長男邦景を三條に住せしめ城を築きて之を守らむ其後五代百五十年の間は三條町に繁榮類ひあうとける(三條長尾氏のことと追て詳にす)

四

抑上杉家の一天万乗れ大君なる皇子の將軍となり玉て關東に下向なり玉に當り供奉なり奉る程の名族なせともより忠義の心深く初めと尊氏の逆をにくみ新田氏と共に征伐の勞を分たせたるも世運れ日に傾くのみならず尊氏一門にとりて姻戚と云加ふるに名望高き家柄も足利氏の禮遇斜ならま北朝へ奏しわけ位官さへ心と高くとりら誠をつくりての推讓に遂に尊氏方に一味し越後を領することゝはなりとわあれ時節到來の上はなにどか忠義を王家に致さんとのま心束の間も忘るゝことあらざるは君臣世々の舉動もて明に知らゝとならん

上杉氏と當國に來より深く民心を得るにつとめ神社を崇敬ひ佛閣を修理風俗人心の改良進歩を謀り玄事と古書に散見する所にして今又喋々を要せま本城寺の如きも此間に於て基礎を固くしたるものなるは編者は斷言するに猶豫せざるなり

● 本城寺の始祖

教海に濶歩せし日蓮上人の如きと已に世上に悉知する所なり上人の剛毅英邁なりこと吾人の敬服に堪へざる所なり爲め幾多の危難と幾多の忌害に逢へ遂に荒僻無慘なる絶嶋に放流せられ玉ふ當時の越後佐渡と就中佐渡の如た殊に辛苦をまめ玉ふこそ凡庸人の堪ゆる所にあふざるへ佐渡に於ける奇事は措き越後よおける艱難は尤も吾人の感格を易たを以て左に數事を掲げんに

かの角田は山は彌彦の秀峰と共に蒲原の西隅に聳へ巉崑蒙茸荆曲鬱蒼せりて狐狸熊猪の之に栖み人縦絶して樵者入らず森々凄凉實は神仙に托するもれある如く傳へさく此嶺一帯に彌彦神明の夙とに經理に勞せられ御子孫の各地に住り玉ひを然せども年月を経まゝに僅の石祠處々に散見するあるれ及にて王家及郡民は奉崇思に任せず荒逕草茂と乱虫露に咽ふさ空く今昔れ感に數行の涙を掬するのみ

日蓮上人の此の山中に於て大蛇を退治ありとのこと人之を傳吾之をさく又茫々た

る海原に激浪さかさま来り乗り出玉へ一舟は木の葉の如く大空より掀けらるゝと
花に當りて南無妙法蓮の題目一揮燦爛僅にこの危難を逃れ玉へ一どの事世に傳られ
たりりゝる聖徳宏智の備へ玉ふをみれば實に一宗を開た玉ふへき善知識とまて世人
の尊敬禮拜するまことに宜なるかな

日蓮上人の高弟に日朗上人なるあり峻峰嶮岨を度り遠く關東より越後に入り遂に幾
千尋の波濤を越て佐渡に行ふの師日蓮上人を御尋ねありてその患苦を慰め玉ひまご
云に至ていその至情至誠後人拔えて袖を活き一ひるもれあを思ふに越佐に此宗の蔓
りまは獨り日蓮上人の力のまからず日朗上人の力また多うまあり乃ちこの本城寺
の開山とまて日朗上人を一位まねくこといひまをたよあらざるを知るへま今本城寺
より公儀へ差上るる文書読みみるに如の左

○寛政元年公儀御巡見にて御尋の趣書上の寫

一勝劣派

長久山

本城寺

兩開山

六老祖日朗上人
九老祖日印上人

○人王九十一代伏見天皇御宇 永仁五百年建立 (明治廿八年迄五百九十九年)

●本城寺開基日印上人の御傳

上人の御傳略は日蓮中教院に御藏板小林是純氏の高僧傳によれて聊か之を述べんに
上人の御父を安高とて朝倉氏を稱せらむいと武勇の御方なるの祖先よほもどく
武功の譽ある家柄なれば姓名を世に知らむ玉へたる豪士なり故ありて久しく蒲原郡
三條に住むらむま御夫婦の間に一子とてあらねど此世をほじさなく思ひたのまか
らぬ月日を何よを爲すこぞもなく送り玉ふのみ御母某氏と大に之を愛ひせめてと一
子を授け玉へど名を高き彌彦の神に日々夜々の祈念をこせ御崇敬ありまるゝにや
文永元年某日(明治廿八年より六百三十余年)玉の如き男子を出生し玉は願意の空
しうらざるまて御父母の喜ひたどへん方な久天を拜み地を禮してそ御養育忽せなら
まをける

され日印上人御生長游はすに及び風貌清秀にまる天資頗る聰敏一をさけは十を知

るの御英敏御父母思やううる田舎にいいつ出世の見込あるへうらま今や北條氏悪逆を逞ふして朝廷の御威光日々に衰ふるさまは澆季の世といふへ返へす返へまを慨かはし余の祖先とも北面の武職を帯ひ宮禁の守護をならせし世の轉變りる避隅よ老の身汝養ひ精練にたも飽くおとならぬ今日のありさま思ひの慚憤の至となり是非とも此兒を出世させ今一度西に沈まん天日を返へし奉り太平無事の御世となりて一天万乗の君を仰かんおその老身の素願なまを涙乍らの御物語に日印上人も御落涙數行暫しの詞もあらざりかざる容を改め御父を慰れ玉ふやう其仰せ御尤もあれど御存一の如く源平以來のあまさま強食弱肉の修羅場なほ一天万乗の大君を玉体安し玉ひま平氏の藤原氏を倒し源氏また平氏を亡して北條氏は家來でござなから源氏をなきもに去て今の威勢は飛ぶどり汝墜し王家の公卿方何れも切齒扼腕すれせもせんすへなるとき久不肖此間に立身して万一の力を王家に盡し奉るともせより願ふ所なるも熟思されしするはど時運の到來せざるをかの張良陳平の智あてせも如何なすへ久もあらず父上の此地よますとて衣食に窮ま玉ふ次第ならぬと青雲の望

をやめかゝる澆季の人心虎狼にひとまき衆生を教ひ導きは次第く善心美風に立ちかへり刀劍殺伐を用ゐす去て天下自ら太平ならんと疑なりきまを如何なる惡逆の北條氏とても天下民心の正義に勝得へからず上の一天万乗の大君を敬ふこと泰時の如きもの出て下と人民をわびせむ時頼の如きあり不肖の今より衆生化導の志を以て畢生の力をのべ永く天下万世の木鐸とならんと満腔の願望なりと誠を顯はしてのべ玉へば御父母の夢の醒めたるやう思召し日印上人に向へ玉へよく申しさけくれたり然らばこれより汝の望に任せんとて郡中名高き石瀬山青龍寺に留學し玉ふことなりぬこの僅に御年八歳のときなりき青龍寺主智觀法印の碩學の高僧ゆる懇篤訓諭深く意を加へ教育なし玉へは學業大に進み識見又衆にすぐれ殊に一宗の教書の勿論密部秘籍悉く博覽し引て内外の諸子百家に至まで通曉し玉へば法印も大に喜ばれ一日上人に向ひの玉ふやう貴殿の學識卓絶如此なまば此上の拙僧の力にていとも及ぶべくもあらずうる多望の御身を以てこれ土に朽ち果んこと惜むへきの限なり大丈夫と生たうらは十分に力を伸てひろき世界に飛揚することを肝要なりと御教訓あり

ければ上人も御尤の次第なりと御了承なし即日法印のものを立ちいで玉ふ尙も諸宗の奥義を極め天下の珍籍奇書をよきあきらめんと先づ鎌倉の形勢を觀察せられり京都に到り南都北嶺の高僧智識を多く訪へ遍く尋ね平生の疑義難題の御問答あり一入の智徳を御研きありたれば混々たる心源法流遠に及ふの古諺の示せり如き上人のうく辛苦艱難をいとい玉の四方の智識に逢ひ咨詢遍参し遊學に月日を累ね玉ふおと殆ど四十年歸途また鎌倉に赴き比企と云ふ処に高僧のありとて立ち寄りて訪ひ玉へば日朗上人のたまへ止觀と云へる經文を御講述ありしをきたまへ忽然大悟徹底玄深省を發したまひ此師ならして直ちに法弟の御約游されぬ日朗上人も快く御許容ありて御詞又貴殿は摩訶止觀第一卷の講述をきられ發明頓悟せられたれば今より名を摩訶一日印と稱あるべしと懇に御話ありこれより斯く御名を改め玉へぬ時に永仁二年なり(明治廿八より六百年前)

上人朗師の御下に追隨茲に二十五年にして朗師の御逝去あり殘る処なく御喪式を終へて名越と云ふ処に御廬をまつらひ本勝寺と名附二三年後御弟子の日靜と申すに

あつて故郷に歸り玉ふとなりぬ是れ實に元享元年の春の末にして道すから御教化を蒙りて喜ぶもの多く道化宗風遠近に行かれて御道德のいや高きを仰さるもなく歸依するものも日々滋かりとぞ

三條町は前も述へし如く上人は御舊里なまは暫く御廬を營み衆人御教化の處碩學大徳の御方なれと天人の感應は影は響に應し水の下よつくり如しをばは不思議にも青蓮華の庭上に生したるをみる人々驚嘆せざるなり乃ち此地に寺坊を營み玉ふおとなり青蓮華寺と名附玉ふ今の本城寺是れなり在住八年より嘉曆三年(五百五十八年前)享年六十五才にて御遷化ありぬ遠近の老となく幼となく深く悼まぬものそなかりき上人御遷化後十年餘にして後醍醐天皇の楠正成公新田義貞公等の御力により忽ち政權を北條氏より回復し玉ひ諸衆初めて聖明の天下に君臨すを拜みたるの或は上人御誠心貫ぬきしにやあらんか目出たかりけりこと共なり

本編日朗上人の御傳記をも詳にしたき筈なれど此に省きたるのいさゝか紙數は都合より不得已かくはなす

●本城寺勝劣派主日陣上人の御傳

上人の御傳の世上に傳ふる所あらず編者と古老にさく所を以て今之を補ふ讀者よろしく察すへー

蒲原よ於ける猿ヶ馬場は北陸の天嶮にて蒲原全郡の鎖鑰なり日印上人一日一人の法弟と從僕を伴れ御化導れ忙しき折とて午後この嶮岨を打ち越へ玉はんとせきこみ急き山の半腹ども覺しく歩を運び玉へーに忽ち山の端は黒雲わき迅雷の聲ととも風さわわかく吹まさび面をむくへきにあらまなさだに突兀たる岩石道は横はり離々たる草の鞋を没するよ加之に老松怪杉の大空を蔽ふて白晝くらくいともれすこきに進み得兼て。とある木根に師弟腰打掛け暫し暴れのやむをばまら玉ふほどに不思議や女性れ叫ぶ聲森深く聞よれば法弟に命一玉ひ汝ち大義乍ら見届け來るへまど平氣に仰あまば法弟氣味あるくも否と申上兼ねたれば獨り山奥さしてふみ入りぬこの法弟御名は日惠とまうー至て強勇の性質なるを上人かねて御まをり玉ふことゝてうくは命一玉へぬ法弟暇申上げ鞋の緒をーめ直ー野逕屈曲二三町も歩み行かれまに

いども妖艶なる美女のたゝすみをれと直ちに進みより如何なれば此の深山中に女性一人たゝすみをるや吾れ今師の命によりさきに悲鳴の聲を便り此に來る何ものあるやと詰りける女性申まやう妾と此山中に栖むこと多年なり曾祖さきに高祖れ御教化にて解脱一歡天喜地今よ於て酬奉るによりなま今日上人のこゝを御過きり玉ふとさ態々まちらまうーわけーなりいと本意なきこと乍らあゝに願あぐる次第の妻の夫兩三日前身まうり候へぬあわれ此兒を御扶けありて教育なしたまひ、生々世々の御恩なりとさめくど啼くさまの物凄さに法弟は身慄なして茫然されば美女の影のうき消ま如くみへす呱呱たる一孤兒岩間をよちて叫ひよぶぞあわれにも不思議の事どもなり法弟かくとみるより已を忘れて孤兒を救ひどり直ちよひさうへーもどの道にてけせと上人手をわけ招きたまへ近く法弟をよひ玉へ事の始終を打ちさし、仰せらるゝやう苦勞てあつた日惠余も此程より夜なく、不思議なる夢見と不審なく思ひたりーにかゝる希有の事こそありつせむ去と乍らこのまゝ養育もせざらんにとあこれこの兒の生長覺束なりとて師弟もろとをいれたまひつれて還り玉ふこれより御心をこ

●本城寺勝劣派主日陣上人の御傳

上人の御傳の世上に傳ふる所あらず編者と古老にきく所を以て今之を補ふ讀者よろしく察すへ

蒲原に於ける猿ヶ馬場は北陸の天嶮にして蒲原全部の鎖鑰なり日印上人一日一人の法弟と從僕を伴れ御化導れ忙しき折とて午後この險阻を打ち越へ玉はんとせきこみ急き山の半腹とを覺しく歩を運び玉へに忽ち山の端に黒雲わき迅雷の聲とをに風さわわかく吹きさび面をひくへきにあらまきなきだに突兀たる岩石道は横の離々たる草の鞋を没するよ加之に老松怪杉の大空を蔽ふて白晝くらくいともれすこきに進み得兼て。とある木根に師弟腰打掛け暫し暴れのやむをばまら玉ふほどに不思議や女性れ叫ぶ聲森深く聞よれば法弟に命一玉ひ汝ち大義乍ら見届け來るへと平氣に仰あまれば法弟氣味わるくも否と申上兼ねたれば獨り山奥さしてふみ入りぬこの法弟御名は日惠とまらう至て強勇の性質なるを上人かねて御志をとり玉ふことにてうくは命一玉への法弟暇申上げ鞋の緒をいめ直一野逕屈曲二三町も歩み行かれまに

ゆども妖艶なる美女のたゝすみをれと直ちに進みより如何なれば此の深山中に女性一人たゝすみをるや吾れ今師の命によりさきに悲鳴の聲を便り此に來る何ものあるやと詰りける女性申まやう妾と此山中に栖むこと多年なり曾祖さきに高祖れ御教化にて解脱一歡天喜地今よ於て酬の奉るによいなま今日上人のこゝを御過さり玉ふとさ態をまらまらうあけいなりいと本意あきこと乍らおに願わぐる次第の妾の夫兩三日前身まらり候へぬあわれ此兒を御扶けありて教育なしたまひ生々世々の御恩なりとさめくと啼くさまの物凄さに法弟は身慄なりて茫然されば美女の影のうき消ま如くみへす呱呱たる一孤兒岩間をよちて叫ひよぶぞあわれにも不思議の事どもなり法弟かくとみるより已を忘れて孤兒を救ひとり直ちよひきうへいもとの道にてけをこ上人手をわけ招きたまへ近く法弟をよひ玉へ事の始終を打ちき仰せらるゝやう苦勞てあつた日惠余を此程より夜なく不思議なる夢見と不審ぞく思ひたりしにかゝる希有の事こそありつをせむ去と乍らこのまゝ養育もせざらんにとあわれこの兒の生長覺束なりとて師弟もろとをいれたまつれて遠り玉ふこれより御心をこ

め厚く御育てありけむと遂に碩徳の高僧をばなり玉へ本宗に光輝を喚發し名譽を海内にあり玉ふ日陣上人の生立此の如くその御成長ますに及び學識高く英氣斗をのむの御氣象あり人と論する雄辯滔々として満坐を去て屈服せしむ
上人已に日印上人の覆育の大恩蒙り又その御訓陶によつて道德堅固の心膽をねり才鋒他宗を壓す然れどもいよく遜抑し玉へ苦學修行年日を積み草鞋四方を巡りて天下の智識に交はり議論を上下して研精磨琢深く得る所ありて而して故郷に還り玉ふ時まさに上杉氏の治世よきてその威望遠邇を服す恰も好し上人の御歸なれば三條城長尾の君臣上下ともに歸依渴仰あるより宗風こゝに振ひ化導大に行はる乃ち青蓮華寺を本城寺と改稱し新たに寺坊を建立せし上人は宗中一旗幟たて盛に本勝迹劣を唱ひ貴賤を風靡し老弱を啓誘す四方の歡喜斜ならず遂に勝劣派祖と仰かむ玉へ本城寺の新局面を開き方々年々の繁榮の基をなす抑斯の宗の如きは高祖日蓮上人の御遺徳もあるへまど雖要するに日明上人を初めとて日印日陣二上人の勤勞よく艱苦を排し御經營ありたまへたる餘徳と云ふへ

今や明治昭代も當り越佐唯一の靈場とて天下諸衆の尊敬讃仰する所となり遠近都鄙の信者と信者ならざるに拘らざるも足を三條の地に在るものは必す杖をの靈場にひき寺坊の壯嚴御威徳の高遠なるを恭禮奉拜せざるはなし豈盛ならずや

● 日印上人の御舊跡

本城寺の東北三條町の南に四日町と云ふ一村落あり兼葑滿望菰蒲茂生維新前まで荒涼極まる所なり然れ共中古はや、開けたる土地と見え地下に於てまゝ、人造のものを見ることありとかや維新後の今日と道路を通り往還滋く昔日の觀なきのみならず却て快濶の眺ありこの村に一の庵室ありは日印上人最初棲遲の故迹なりと傳この庵室いどを幽静閑雅の地にて而も明燈透徹の靈水出てしを世移り人替り加ふるに人戸接近せしよ昔年の光景もあらずし村内の柳樹悉く屈曲せざるなまは日印上人に乘りたまひ牛の振らし名残と傳ふの信なるか
又村に西に島田川ある小流ありて此は蜘蛛橋と云へる古迹は昔日上人この流れを度くんとありたまへ共梁木なまこのとき蜘蛛糸をひくこと万條容易上人を彼岸に越さ

め厚く御育て有りけと遂に碩徳の高僧をばなり玉へ本宗に光輝を喚發し名譽を海内にあり玉ふ日陣上人の生立此の如しその御成長ますに及び學識高く英氣斗をのむの御氣象あり人と論する雄辯滔々として満座を去て屈服せしむ

上人已に日印上人の授育の大恩深蒙り又その御訓陶によつて道德堅固の心膽をねり才鋒他宗を壓す然れどもいよく遜抑し玉へ苦學修行年日を積み草鞋四方を巡りて天下の智識に交はり議論を上下して研精磨琢深く得る所ありて而も故郷に還り玉ふ時まさに上杉氏の治世よきてその威望遠邇を服す恰も好し上人の御歸なれば三條城長尾の君臣上下ともに歸依渴仰するより宗風こゝに振ひ化導大に行はる乃ち青蓮華寺を本城寺と改稱し新たに寺坊を建立せし上人は宗中一旗幟たて盛に本勝迹劣を唱ひ貴賤を風靡し老弱を啓誘す四方の歡喜斜ならず遂に勝劣派は祖と仰か玉へ本城寺の新局面を開き万々年々の繁榮の基をなす抑斯の宗の如きは高祖日蓮上人の御遺徳もあるへまど雖要するに日朗上人を初めとまて日印日陣二人の勤勞よく艱苦を排し御經營ありたまへたる餘徳と云ふへ

今や明治昭代も當り越佐唯一の靈場とまて天下諸衆の尊敬讚仰する所となり遠近都鄙の信者と信者ならざるに拘らま荷も足を三條の地に在るものは必ま杖をのみ靈場にひき寺坊の壯嚴御威徳の高遠なるを恭禮奉拜せざるはな一豈盛ならずや

● 日印上人の御舊跡

本城寺の東北三條町の南に四日町と云ふ一村落あり兼葑滿望菰蒲茂生維新前まで荒涼極まる所なり然れ共中古はや開けたる土地と見え地下に於てまゝ人造のものを見ることありとかや維新後の今日と道路を通り往還滋く昔日の觀なきのみならず却て快瀾の眺ありこの村に一の庵室あり日印上人最初棲遲の故迹なりと傳この庵室いとも幽静閑雅の地にて而も明整透徹の靈水出てしを世移り人替り加ふるに人戸接近せしよ昔年の光景もあらずなし村内の柳樹悉く屈曲せざるなま日印上人に乗りたまひ牛の振し名残と傳ふ信なるか

又村に西に島田川ある小流ありて此は蜘蛛橋と云へる古迹の昔日上人この流れを度ふんとありたまへ共梁木なまこのとき蜘蛛糸をひくこと万條容易上人を彼岸に越さ

せまうせりとこまを以て按ざるに島田川は今日の如く小江にあらす舟楫を要せしものなるへま而してこの水流に百丈の妖蛇を栖まゝめて人をも害せしとありとか按ざるに昔の刈谷川と合流したることありて巨流みてありしや尙古老に尋て知るへい本城寺近傍の村落は本城寺村と稱し今は本城村と改稱せるが遺跡故墟と思ひるゝ箇處なれにあらねど今と一々辨識しかたしやにゆく本城寺その他の觀を改めたるは信濃川に東流せしより洪水暴漲の患ありて三條城の古跡も湮滅えたるを見てそれ他を推すへい

三條町より本城寺へ詣でる途に牛池と云ふあり池の西に一の庵室あり傳へて云く牛池の日印上人の乗りたまひし牛こゝに至りて跌き倒ると故に靈跡とて今に存せその池水は諸病に驗ありとて汲取るものなり池西の一庵はもと青蓮華寺の舊趾なりと云

●本城寺に遊ぶ或人の評話

本城寺の殿堂門蕪古色を帯ひてな觀るへま就中老木の森々として蟠屈鬱蒼するは靈境の古刹たるに負すと云ふへまた、時々祝融の災ありてその舊觀を殺たるは恨むへ

一況や本堂の烏有に歸せまに於てをや今や表大門六角堂番神堂等外にあり内には鐘樓とれ他些を存するに止まる
此回御方丈庫裏の新築ありその結構とり推せば御本堂の雄大莊嚴に竣功し舊時の構造にまさることも劣ることなきを信せしるの古色掬すへきものなきに至ると遺憾なり余は本城寺に詣てせしとき殿堂は何れも綺麗なるを賞せしり一松樹下金三百圓〇〇〇〇の明治十一年の御巡行の際 天皇陛下より御寄附ありしを知以て 皇家大御心のある所推察を奉るに餘あり余と四月十五日御虫干を縦覽せしり文書に見るへあらす聽ならく寺僧頑拗にして示さすと珍器奇品十數の各室に縦陳横列せしり名筆畫古畫もありと余一々あれを点檢熟視せまた、記を日印上人の遺牛とて彫刻れ大模型あり生牛に異なりと又日蓮上人の御像あり神彩奕々實に名畫あり此他南無妙法の掛軸は晒やの木綿より數多く字格みな頑拗魯劣昔日未開の歴史を緝く思あり余の一生に間にもし日蓮僧に逢ふことあらば忠告して云ん心眼を潤六にせよ文字と精神を表す乍去掛軸一概視るへうらさるもの四五ありと云々

せまうせりとてを以て按ざるに島田川は今日の如く小江にあらす舟楫を要せしものなるへま而してこの水流に百丈の妖蛇を栖ましめて人をも害せしとありとか按るに昔の刈谷川と合流したることありて巨流ありて向古老に尋て知るへい本城寺近傍に村落は本城寺村と稱し今は本城村と改稱せるが遺跡故墟と思ひる、箇處なれにあらぬと今と一々辨識しかたしやにゆく本城寺その他の觀を改めたるは信濃川に東流せしより洪水暴漲の患ありて三條城の古跡も湮滅したるを見てこれ他を推すへい

三條町より本城寺へ詣でる途に牛池と云ふあり池の西に一の庵室あり傳へて云く牛池の日印上人の乗りたまひし牛こゝに至りて跌き倒ると故に靈跡とて今に存せし池水は諸病に驗ありとて汲取るものなり池西の一庵はもと青蓮華寺の舊趾なりと云

●本城寺に遊ぶ或人の評話

本城寺の殿堂門蕪古色を帯ひてな觀るへま就中老木の森々として蟠屈鬱蒼なるは靈境の古刹たるに負すと云ふへまた、時々祝融の災ありてその舊觀を殺たるは恨むへ

一況や本堂の鳥有に歸せまに於てをや今や表大門六角堂番神堂等外にあり内には鐘樓これ他些を存するに止まる

此回御方丈庫裏の新築ありその結構とり推せば御本堂の雄大莊嚴に竣功し舊時の構造にまざることも劣ることなきを信せし、この古色掬すへまものなきに至ると遺憾なり余は本城寺に詣てせしとき殿堂に何れも綺麗なるを賞せしり一松樹下金三百圓

〇〇〇〇の明治十一年の御巡行の際 天皇陛下より御寄附ありしを知以て 皇家大御心のある所推察を奉るに餘あり余は四月十五日御中干を縦覽せしり文書に見るへあらす聽ならく寺僧頑拗にして示さずと珍器奇品十數の各室に縦陳横列せしり名筆畫古畫もありと余一々おれを点檢熟視せまた、記を日印上人の遺牛とて彫刻に大摸型あり生牛に異なりと又日蓮上人の御像あり神彩奕々實に名畫あり此他南無妙法の掛軸は晒やの木綿より數多く字格みな頑拗魯劣昔日未開の歴史を緝く思あり余の一生に間にもし日蓮僧に逢ふことあらば忠告して云はん心腹を瀾大にせよ文字と精神を表す乍去掛軸一概視るへうらざるもの四五ありと云々

(追加) ● 本城寺を論ず

編者と前段に於て一様信據をへき事實に照らして陳説一番きりに一推考せるに本城寺の本成寺など云ふ点に疑をなすものに一辨を與ふるの必要あるは思ふ。古記によきは城を成と書すは非なり某氏に録に本城寺殿妙喜日清大居士と同寺過去帖にあり云々又本成とかくことは徳川氏以來あることは公義の文書に明也又長久山と云ふことに至ても山吉孫次郎長久と元享元年より文和四年まで三十五年此長久以來寺号を今の如く改めたりと聞ゆ然らば日印上人開基以來は青蓮華庵などと号せるも云々や某氏の録もあり然して山吉家の系圖を調ふれば長久なるものなりと云編者の云如く本成は城にして全然本城寺は上杉時代に興隆せしものにして長久山と云へしは長尾家の菩提を吊ふもるは意味なるを後年長久を云へる人を過去帖も挿入せたるものならまや若しこのと妄ならは當時一時云譯の爲にかくせしか尙同寺の文書によりてまをく上杉時代に興隆せたる次第を明にす同寺の文書に云く貞和年中勅願の綸命有之綸旨數通有之次中古焼失云々貞和は北朝の年号(証一)日靜は足利尊氏の

叔父に候(証二)以上二証により同寺の上杉家時代の興隆を明にせへまこの以前の僅の小庵なるへま同寺は永仁に建立とされど該年号と日印上人の日朗師に謁して發悟せられもる年号なるは傳中にありそをとり二十余年と關東も御坐らせ元享元年舊里に御歸同三年に遷化なること傳中に記すか如し此後南北兩朝は党派起り戰爭絶ゆるな一貞和年中上杉氏當國を管領たり惟ふに山吉氏は土豪にまて代々れ一旦那も過たまこの山吉氏に依り興隆したるに非す同寺の山吉氏に力を得るは謙信れを犯なるへし而して山吉氏か三條城主ならざることを別に説へし同寺には又上杉長尾氏の判物多きを見れば三條城主長尾氏の恩遇を受けたることと相違あるへからず然るにその文書を城主俊景に滅亡と共に埋没に歸せしめ(上杉長尾一族の判物はこゝも載せず)獨り一部將たる山吉氏に系圖が同寺に保存あらんとは歴史研究者の爲も深く遺憾に堪へざることともなり要するにこれらの事實は却て同寺が如何に三條長尾氏に厚遇を受けたるかを推測すへし又その初め微々振はざるを憂を知るに足り専ら勢威によりてその興隆を願ふ心は深くまをを知るに足らんとすわら當國寺社に

文書の缺乏は原因主として此に存するもの多し勝けて慨くへたりや編者の今古寺名
刹の興廢は國家に至重の關係あるを思ふと共に其文書の切要なるもの厳に保存の
全きを希ふものあり願くは編者の文辭粗拙に去て章句の亂雜なるを咎め玉はず大方
篤志者十分に思考し教示し玉ふあらば獨り編者幸のみならず謙み大方に白す

●● 附 錄

◎ 無常和讃 (其二)

静に無常を觀るに。有爲轉變の世の中。電光朝露の如くにて。夢泡影まことなく。
一切すべて止まらず。泉下の流れ速やりに。盛者必衰世のなふひ。浮雲の榮花程わらじ。
且に紅顔うるいしく。世路に誇る人の身も。夕部は野邊の白骨と。朽てはうなき命なり。
後生と聞ば遠けれど。知すや今日も其日成。神籠のとりならで。開くを待て飛ざりぬ。
身の風せんの燈火の。まばしの中を危うし。頓死まかこよ遮れど。拙なき心おどろかす。
昔一の友を算ふれば。皆露霜と消えはてす。僅か此世も残る身の。昨日を今日も徒らふ。
明し暮して思ふこと。皆おれ惡趣の焰のみ。朝より暮になせる業。多くは地獄の新なり。
息胸臆に止みぬれば。屍は野外に送らるる。妻子珍寶。
臨命終時不隨者。示御法もよそに聞く。名利の繼に繋がれて。浮世をめぐる小車の。
法の道には趣むかす。無明の雲の晴やらで。暗き闇路を迷ひなば。泣々ひとり行く道の。
誰問ふ人をあらず。而。業力引て行くさき。三途は河や死天の山。閻魔の廳に跪まづさ。

文書の缺乏は原因主として此に存するもの多し勝けて慨くへらんや編者の今古寺名
刹の興廢は國家に至重の關係あるを思ふと共に其文書の切要なるもの厳に保存の
全きを希ふものあり願くは編者の文辞粗拙にまて章句の亂雜なるを咎め玉はず大方
篤志者十分に思考し教示一玉ふわらと獨り編者れ幸のみならん謹み大方に白す

●●附 録

◎無常和讃 (其一)

靜に無常を觀するに。有爲轉變の世の中。電光朝露の如くにて。夢泡影まことなく。
一切すべて止まらず。泉下の流れ速やうに。盛者必衰世のなほひ。浮雲の榮花程あらじ。
旦に紅顔うるいしく。世路に誇る人の身も。夕部は野邊の白骨と。朽てはりなき命なり。
後生を聞ば遠けれど。知ずや今日も其日成。神籠のとりならで。開くを待て飛ざりぬ。
身の風せん燈火の。まばらの中を危うし。頓死まきこも遮れど。拙なき心おどろかず。
昔の友を算ふれば。皆露霜と消えはてし。僅か此世も残る身の。昨日を今日も徒らふ。
明し暮して思ふこと。皆あれ惡趣の焰のみ。朝より暮になせる業。多くは地獄の薪なり。
息胸臆に止みぬれば。屍は野外に送らるる。妻子珍寶。
及王位。

臨命終時不隨者。示御法もよそに聞く。名利の繼に繋がれて。浮世をめぐる小車の。
法の道には趣むかず。無明の雲の晴やらで。暗き闇路を迷ひなば。泣々ひとり行く道。
誰問ふ人をわらず。而。業力引て行くさき。三途は河や死天の山。閻魔の廳に跪まづ。

呵責のせめを蒙りて。阿防羅刹の手に渡り。無間の炎に身を焦し。天に仰き地に伏して。恨と悔るも益あらず。急ひて浄土を願つ。彌陀の悲願を憑べ。頼む甲斐ある御佛の。弘誓の船は隔てなく。洩さで渡り玉ふぞや。

◎無常和讃 (其二)

生死事大おろるべ。無常迅速とまらず。光陰惜むべ。時人待ぬ世の中の。月日に關守在されば。死期のみ近く雷神の。どいろくも怖しき。冥途の迎へ責くれれば。たまの臺を磨きつ。錦のしとね飾る身を。無常の嵐はげく。花の姿もちらりうせぬ。妻子眷屬あつまりて。うらを懷て悲しめど。迎も歸らぬ死天の旅。綺る絹のよやな。麻の衣のたひとへ。身もそふ物の影計り。親さ限りなげと。冥途へ伴ことぞなき。千筋と摩くろ髪も。逢かるとも散見だれ。夕部の煙と身の消て。名さへ朽行あさ原。塔婆の文字も見別す。おくれ悲む人をまた。程無空しく成ぬれば。其塚さへもあど絶て。苦のみ残る果敢さと。我身もそれと願見ず。子孫を愛し財寶を。積み貯へて惜めても。永き香泉の糧ならま。神うのれさまよへど。影より外は連もな。たれか哀を訪らぬ。

死天の山路は峻く。さん途の川も邊なし。進めば水火の波荒く。かへれば劍巖登たり。進退畏怖の中に居。天に叫び地をたつき。嘆き悔めと返らトや。切に此土を厭離して。はやく浄土の門に入。彌陀の悲願を頼つ。稱名怠たるとなれ。

◎無常和讃 (其三)

生者必滅。皆人の。老て逃れぬ死天の旅。老少不定世のならひ。親に先だつ子の別れ。身を萬世と祈るも。命は蜉蝣の暮またト。心千世を期せ共。姿は権花の朝の露。生の日く遠ざかり。死は念々に近づたり。駒の足なみ急がしく。羊の歩みひまなきも。世路は繁に紛れては。めぐる月日を忘つ。次第に衰る魂の緒の。いと危身ながらも。未頼むこそ果敢けれ。昨日の友も今日の無。無の數添ふ夢の世を。いつとて覺る心なき。夜あく胸を傷む。無常の烟。

船岡の。

山に立つ消やらず。朝な夕なに袖まはる。泪いたまや鳥部野の。草葉に結び絶もせず。本のしづくや末の露。後れ先だつ世の中の。瀬を關淵と爲ぬども。命を留るしがらみ。な。と知可人の身の。終には魂のさりて後。行衛もまれぬ浮雲の。定めなき世は何事も。

皆偽みなうそまたふひせつ。死しするばうりは誠也まことなり。去いして歸かへりぬ身みあれ共とも。ゆきて留とどる西さいのうら。色いろを見みむ。稱名しょうみやう一乘いちじやう多善根たぜんこん。罪障ざいじやう残のこるくまも亦またく。一念いっぺん十念佛じゅうねんぶつ來迎らいじやう。本願ほんげん誤あやまる事ことぞなき。

◎無常和讃 (其四)

凡たゞそ諸行しよぎやうの無常むじやうにて。これ生滅しやうめつの法ほふどかや。萬法まんほふどもに跡あとなき。水みづに映うつせば影かげにして。紅顔こうげん往むかて還かへへらねば。衰老さいらう來きたりて且かつさらす。鏡かがみをてら一詠いちぎやうむれば。知らぬ翁おきなの影かげなれや。面おもてにたむむなきの綾あや。腰こしに帶たひたるわづさ弓ゆみ。頭かみのゆさや眉まゆのまも。四季しきの轉變てんぱん身みに移うつり。眼まなこに春はるのうす見みさち。耳みみには秋あきの蟬せみのふる。身みの一重いっじゆうなるうは衣ころも。夏なつの日ひましくるみつ。肌はだはかじけ冬の夜よの。寒さむさ嵐あらしあはばら屋やの。筋骨きんこつあれて淺あはまき。行ゆくもくへるも千鳥足ちどりあし。鳩はとの杖つゑにし助けられ。老會らうかいの森もりの老らうぬれば。若わかうとと何日なんじつか。兒こよのへりて自まづから。智惠ちゑの鏡かがみを曇くもりつゝ。故もとの姿すがたもいつ地行ぢぎやうき。盛さかの色いろうつろひて。わづか梢こすへに散ちのこる。花はなのあらしをまつ命いのち。仇あだなる老らうの隠かくれ家がを。せやせん角かくと計はかりふは。雪ゆきの佛ほとけのいとなみの。聽きてはかなき例たとへなり。さりとて罪つみの器うつはを。知しで愛あいする此身このみにも。佛ほとけのたぬ備そなへつと。

説とる御法みほふの花はなのえに。結むすぶ誓ちかひぞたのを一ひとき。

◎無常和讃 (異本)

淨土沙門 水越龍圭謹寫

歸命頂禮きみやうちうらい黒谷くろやの。圓光大師えんくわうだいしの教しよへに。人間にんげんわすり五十年ごじゅうねん。花はなに喩たとはゆるを顔かほの。露つゆよりもろさ身みを持もちて。なせに後世ごせうを願ねがふ。設たごへ浮世うきよに長ながらへて。樂たのみ心こころにくらまとも。老らうも若わかさも妻つまも子こも。後あとれ先まへだつ世よの習ならひ。花はなを紅葉もみぢも一盛ひとさかり。廿三はたみそのひとくを。今夜枕こんやまくらをかたむけて。直ただに頓死とんしするもあり。朝あに笑わらひ。稚兒わらわも。暮くれに煙けむりと成なるもあり。今日けふは他人たにんの葬禮そうらいを。送たくりて我身わがみも明日あふり又また。化野鳥部野客たけのとりべののきやくとなる。これに思おもへば自まづから。念佛唱ねんぶつじやうへねがふべき。

◎無常和讃 (異本)

人間にんげん匆々きんきんたることと。衆務しゆむを營いとなむ故ゆゑぞう。日夜にちやに命いのちの去さらむ。悟さとりたる果敢はかさと。親疎しんそ同どうく去されむ。我わがみの無常むじやうを願ねがふ。老少らうせう共にささたてど。不定ふぢやうの界まかひに驚おどろかず。人の命いのちとどまらず。山水さんすいよても甚はなだ。僅わずかにけふ迄までもて共とも。あまの命いのちと期たし難がたし。月日つぎひれ積つるに隨したがひて。ちひむる命いのちを知しす。顔かほ。屠所とほにねもむく羊ひつの。歩よ々の思おもひ是これなふん。

東岱前後の夕々むり。昨日も難た今日も立。北亡朝暮の草のつゆ。後世をきだつ例なり。
 輪王位さかたれど。七寶久しく止まらず。天上樂々み多けれど。五衰早久ぞ来りたる。
 刀利天上億せんさい。大梵王宮のまん禪定。是らの樂み皆ながら。遂に三途も隨かひて。
 人天有爲の樂々みは。電光朝露の如くなり。須臾に三途に回なば。長時の苦いりよせん。
 輪廻生死の間だに。至ぬ處そなかりたり。梵天刀利の樂をうけ。刀山劔樹の苦も受た。
 流浪三界内。
 只是癡愛によつて也。生已歸老死。
 争う此等の苦を出ん。

人身二度うけがた。佛敎あふこと又難。皆人こゝろ一つよて。彌陀の名號唱よべ。
 無常須臾の間だあり。且暮いつとどか辨へむ。我らも人を願はく。頭然を拂り如くせよ。

長夜の眠ひとり空め。五更に夢おどろたて。靜に此世を觀すれば。僅に刹那の程ぞか。
 三界すべて無常なり。四生何れも幻化なり。よの中住人のまな。假ば夢にぞ似りたる。
 凡る生より死に至り。時として猶安からず。四慢互よわらそひて。三毒相續まゝさえず。
 流轉生死たづらに。六道三途を巡るのみ。いりなる宿縁催して。超世悲願に逢ぬらん。

過去の宿善有ければ。此回斯るをえ多り。敎のごとく修行せば。如來を見事難からず。

◎ 無常和讃

〔無常の四句の頭〕

越前 今立 東清松

嫌々ながら死出の旅。路錢も無て越なれば。早くも三途の大河也。衰立釜も落ち込んで。
 焔に焼れて苦を受る。平生娑婆も居る内に。年は二八の若むとた。知識に逢て法をた。
 利益受えれば無量壽。主は阿彌陀の佛あり。類の九品を分るは。親二人で釋迦と彌陀。
 脇目伏ふらず頼な。耀く光明に受取られ。余所に往かれぬ我心。たくは胸の信心よ。
 禮は佛おんの稱名よ。即時に正定れ數に入。罪も障も彌陀任せ。寢も覺ても隔てなく。
 南无阿彌陀佛稱つ。樂々後世を安ん。無爲の都を願ひつ。有爲の此世を暫くせ。
 みのち終るを幸ひに。乗り越もの生死海。自然くら往く西の國。苦も無着し報土にて。
 頓て蓮華に化生えて。儘に成身ぞ受にける。化益も生の心と。再び妙服を着直して。
 此世に又と還り來ん。回向するのと還相と。寺へは比丘と還來て。ほら難有の佛願を。
 さる聞々と敎めせ。聞く一念に信を得て。ゆるく喜へ佛恩を。目出度往生仕ぞう。
 身に王法を守りつ。確をたくはへ内心に。得難た眞因已に得て。開く妙果は安ようど。

最早追付無常のうせ。せまる我身の体なら。捨て、願土へ至べし。これ濟度のはん望よ。
あら有がたや嬉やな。南无阿彌陀佛く。

◎ 日印上人和讃

南無や日印上人。越後のふじの彌彦山。高くたふとく天雲も。いゆさり憚る此山は。
三世のみなを信濃川。清き流れの法のとづ。汲つる人の肝むかふ。心ますみてうつ蟬の。
よの濁には身は染で。懸たぞらむ昔のとの。一人の旅の死出の山。越安からむぬば玉の。
暗き闇路の隈をなく。てらせる雪の白妙の。妙の御法の御光りは。四方よ輝あらがねの。
土より厚五百ひさの。岩よりのさき大石の。寺のおしへの法を言。法のいさすへ玉と言。
たまの眞珠と天地の。別れぬささの久遠き。佛の疾くさどらひて。恵み置れし末の世の。
道のまるへの追分よ。立たまひたる又と無。法のみりを敷嶋に。然をしかれてんや白。
つもる雪よりいと清。仰く高根の尙は高く。秀て畏き法れ御效へ。

附 録 終

明治廿八年三月卅一日印刷

明治廿八年四月十日出版

著 者 擁 天 堂 主

新潟縣南蒲原郡三條町字二ノ丁第百卅三番戸

編 輯 兼 刷 人 大 箭 卯 吉

同 縣 同 郡 同 町 字 三ノ丁 第 九 十 九 番 戸

發 行 人 野 口 貞 造

同 縣 同 郡 同 町 字 二ノ丁 第 百 卅 三 番 戸

發 行 所 樋 口 書 舗

最早追付無常のうせ。せまる我身の体なら。捨て、願土へ至べし。これ濟度のはん望也。
あら有がたや嬉やな。南无阿彌陀佛く。

◎ 日印上人和讃

南無や日印上人。越後のふじの彌彦山。高くなふとく天雲も。ゆきさの憚る此山は。
三世のみなを信濃川。清き流れの法のとづ。汲つる人の肝ひかふ。心ますみてうつ蟬の。
よの濁には身は染で。懸たどらむ昔のとの。一人の旅の死出の山。越安かむむねば玉の。
暗き闇路の隈をなく。てらせる雪の白妙の。妙の御法の御光りは。四方は輝あらがねの。
土より厚五百ひさの。岩よりのうき大石の。寺のおしへの法を言。法のいえずへ玉と言。
たまの眞珠と天地の。別れぬささの久遠き。佛の疾くさどらひて。恵み置れし末の世の。
道のるへの追分よ。立たまひたる又と無。法のみりを敷嶋に。然をしかれていや白。
つもる雪よりいと清。仰く高根の尙は高く。秀て畏き法は御教へ。

附録終

明治廿八年三月卅一日印刷
明治廿八年四月十日出版

著者 擁天堂主

新潟縣南蒲原郡三條町字二ノ丁第百卅三番戸

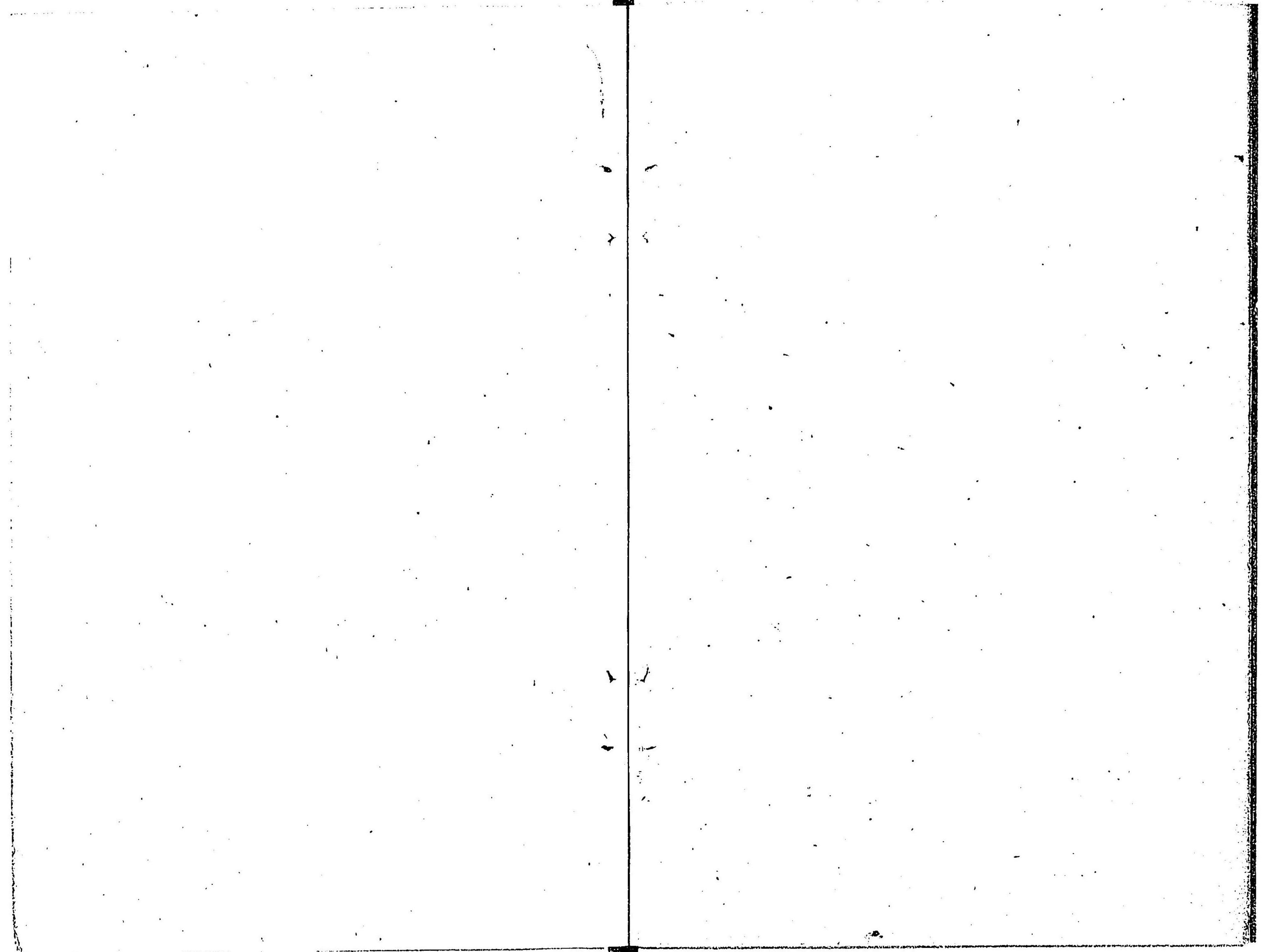
編輯兼刷人 大箭卯吉

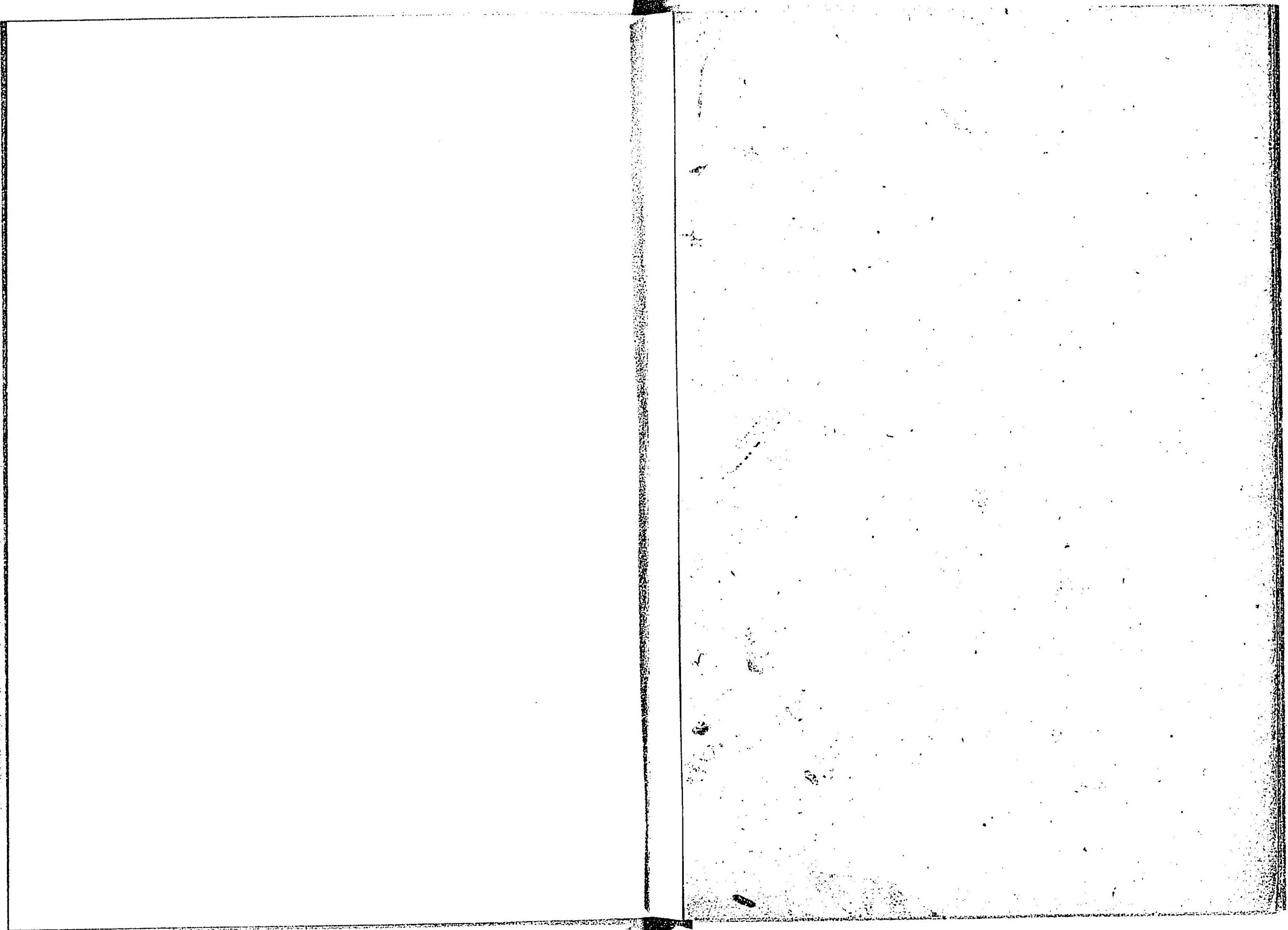
同縣同郡同町字三ノ丁第九十九番戸

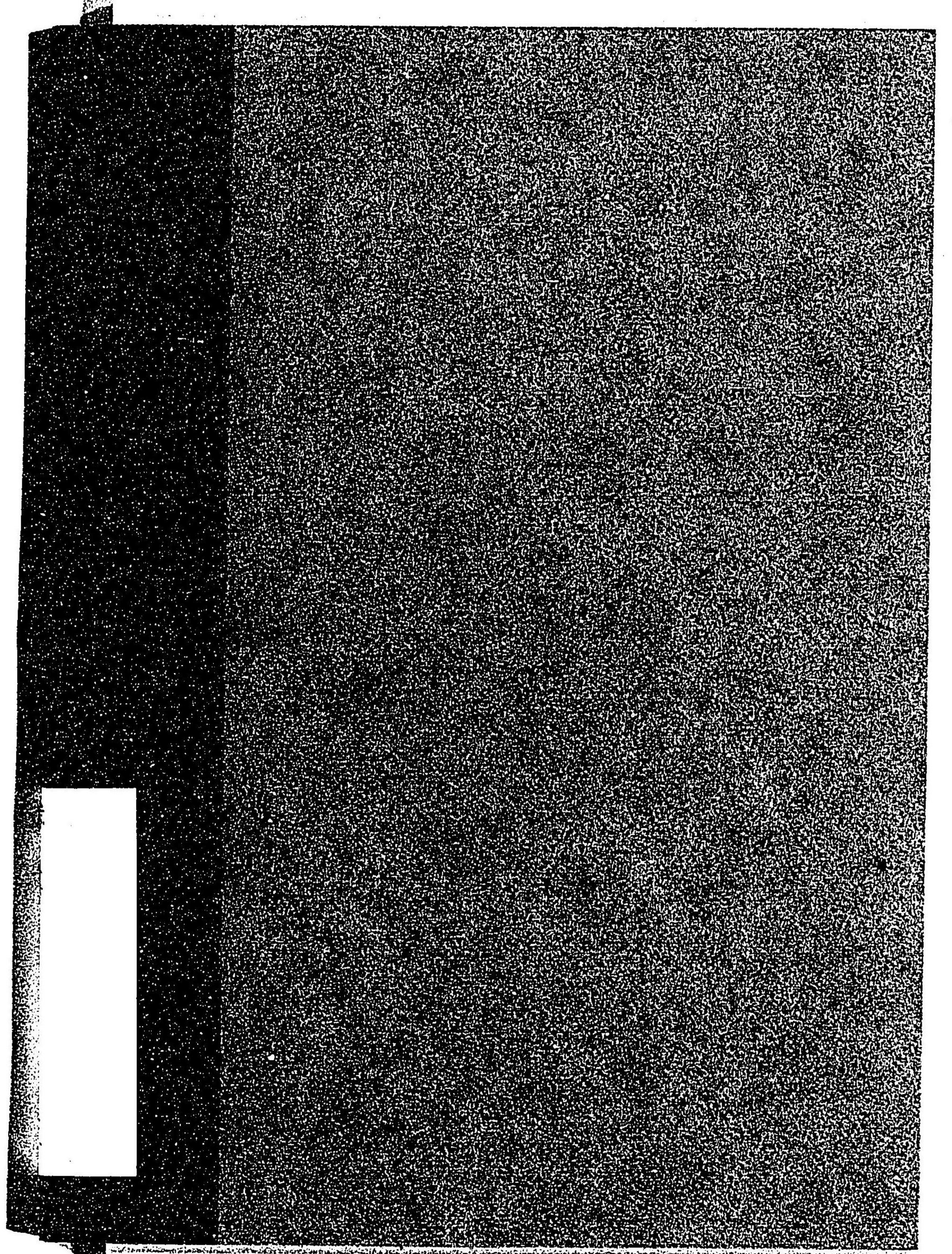
發行人 野口貞造

同縣同郡同町字二ノ丁第百卅三番戸

發行所 樋口書舗







特 55

281

北越
古刹 本城寺の由来

国立国会図書館

019844-000-0

特55-281

本城寺の由来

擁天堂主/著

M28.4

ABG-0675

